

剪定枝葉を「緑葉堆肥」に 想葉 農地に活力、生産促進

多くは廃棄物となっている植木の剪定枝葉だが、優良な堆肥にして再利用されているケースがある。堆肥の製造販売を手掛ける想葉（田極勝義社長、神奈川県相模原市南区）では、剪定した枝葉から「緑葉堆肥」を製造し、農家や流通業者に提供。農業や化学肥料で弱っている農地に活力を与え、モモの糖度アップやコマツナの生育促進など、高品質生産に寄与している。

同社は2013年11月、然に習い、自然のままの枝葉を30ミ以下に粉砕の設立。田極社長（37歳）は元々、植木職人。緑葉堆肥は、独立前に勤めていた造園業者の取引先が開発していた「大久保式緑葉堆肥」にアレンジを加えた。

それまで剪定枝葉は廃棄物として費用をかけて処理していたが、環境保全にも取り組む中、「自

商品名は、「トローヨ1号」。剪定作業などで切除された樹木の成育中に吸収できるものに弱アルカリ性（pH7.5）で、石灰などによる矯正の必要はない。既存の土に20〜50%混ぜるだけで肥沃な培養土になる。

製造過程では薬品などは加えず、製造期間を短縮するための畜糞尿も混ぜない。田極社長はその理由を「現在の畜糞尿は与えている餌が高濃度、栄養単一飼料で抗生物質やホルモン剤などの添加物を含んでいるため、化学肥料とあまり変わらないようになってしまつた」とする。

自然に近い状態にするため、製造は屋外で行い太陽光や雨も吸収させる。大久保式のノウハウに加えた田極社長のオリジナルノウハウとしては、木の幹を焼いて炭にして混

ぜ込み、通気性などを高めている。商品化までには通常1年以上必要だが「手間とコストがかかっても農家のためになる堆肥を作りたい」とする。齊藤社長は「糖度が1度は違ってくる。モモは品質の悪いものが混ざっていると命取りなので、生産するモモの糖度が低い農家を対象に配布し、底上げを図っている」という。同社では今年からブドウでも導入する予定だ。

（想葉）電話0421-7051-6243、HP <http://souyouin.co.jp/>



堆肥は完熟の過程で発酵し、攪拌すると湯気が立ち込める



剪定された枝葉を専用の機械（右）で粉碎



粉碎されてさらさらになった枝葉（上）が、完熟後は真っ黒な堆肥（下）に生まれ変わる

